

# 市場から世界をみれば

ISG 情報システム株式会社 大谷淳一



大豆食品メーカーに、「遺伝子組み換え大豆を使用していない」旨を表示している食品について質問してみた。これらの食品には「1粒も遺伝子組み換え大豆は入っていないのか」と。

また、油脂の原材料でも表示義務はない。表示。そこから輸入されるあるナタネやゴマなども、ほとんどが輸入製品である。これらから作られる二次加工製品もGM作物を使用している可能性が高い。油脂からは石鹼や化粧品も製造されているのだ。加工段階でたんぱく質やDNAが分解されるのであるから、それほど神経質になる必要はないのかもしれない。しかし、私たちの場合は、鶏、豚、牛などの家畜M作物から逃れることはできないという事実だけは知っておいたほうがいいのではないか。

平成21年度の農林水産省は、輸入された飼料による鶏、豚、牛などの家畜M作物から逃れることはできないという事実だけは知っておいたほうがいいのではないか。

増加することになる。次に、肉の問題に移る。私たちは以前、国産の肉が安全・安心であると見て、BSE問題の時に米産牛肉の輸入を禁じた。しかし、「遺伝子組み換え」という観点から見ると、海外からの輸入肉であるのが国産の肉であるのが、遺伝子組み換えの飼料を食べている点では一緒なのだ。つまり、二次製品である加工食品と同様、肉類もGM作物を使用して生産されているのである。

## 第21回「身近になった」遺伝子操作④

表示について、もう少し述べておこう。明らかに遺伝子組み換え作物を使用しているにもかかわらず、そのことの表示が義務付けられていない食品がある。それは醤油、大豆油、コーン油である。

豆腐、納豆、味噌、醤油など、日本の食生活に欠かせない商品の原材料が大豆である。国産大豆の生産量は消費量の5%前後に過ぎず、大部分は輸入品である。大口輸入先のアメリカはGM大豆を大々的に生産しているのか、答えられないのか、どちらとも言えない。

ここで見方を少し変えよう。サラダなど、そのまま直接食べる野菜や果物などに関しては、国内栽培が主流とあって、生もののGM作物が私達の口のに入ることはいまのところ考えにくい。しかし、この飼料の輸入は主にアメリカなどに頼っているが、アメリカはGM作物生産の本家本元である。

このように考えれば、私たちは直接あるいは間接に、GM作物が使われた製品を毎日のように摂取していることになる。遺伝子組み換え食品は確実に私たちの体に浸透している。

これらの食品は、加工の過程で原料のたんぱく質やDNAが分解されるとして、表示を省略できることになっているが、ここでもしるい現象が存在する。省略を認められているこれらの商品にも「遺伝子組み換え大豆を使用していない」と表示されているのである。

大豆を大々的に生産しているのか、答えられないのか、どちらとも言えない。

まず加工食品について考えよう。例えば醤油などは、GM作物を使用し卸売業者向けのコンサル

この飼料の輸入は主にアメリカなどに頼っているが、アメリカはGM作物生産の本家本元である。

### 【略歴】

1957年北海道美唄市生まれ。85年、業務改革、講演を各地で行っている。主な執筆として「青果卸の業務改善」

### 「食糧操作」

などがある。